

教育研究創発国際研修における学術活動報告書

令和 5年 2月 28日

氏名 久島 裕介

所属 基礎教育学 コース

指導教員名 小国 喜弘

1. 研究課題 1950年代の生活綴方を中心に据えた教師の教育研究の研究

2. 報告する学術活動の実施期間 令和 5年 2月 21日 ~ 令和 5年 2月 23日

3. 日本学術振興会特別研究員 (DC) の現在の採用状況 DC1 DC2 採用無し

4. 学術活動

国外 国内

①英語論文公表

②研究科教員の研究プロジェクト参加

③フィールドワーク

④国際会議 (研究発表 運営補助 出席のみ)

⑤研究会 (研究発表 運営補助 出席のみ)

⑥研究指導委託

⑦留学

⑧国際研修

⑨国際インターンシップ

⑩その他 (具体的に:)

5. 学術活動実施の概要

※上記4で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

- ① 英語論文公表
(著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要)
- ② 研究科教員の研究プロジェクト参加
(プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、プロジェクトの概要)
- ③ フィールドワーク
(調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、調査先の概要)
- ④ 国際会議
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑤ 研究会
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑥ 研究指導委託
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間(年月日)、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要)
- ⑦ 留学
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間(年月日)、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要)
- ⑧ 国際研修
(プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間(年月日)、プログラム概要、研究発表内容等の概要)
- ⑨ 国際インターンシップ
(プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間(年月日)、具体的な活動、プログラム内容等の概要)
- ⑩ その他(具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度等の概要)

学術活動区分 (①～⑩を記入)	④
<p>形式：研究発表 学会・会議名：Education for Sustainable Societies in a Changing World (国際セミナー) 国名・都市名：日本・東京 (対面) 発表題目名：The significance of “practice study” as a prehistory of “lesson study” : Focusing on the “Association of the Educational Science” in the 1950s 発表形式：口頭 発表予定年月日：2023年2月21日 発表内容等の概要： 今日の日本では、教師の多忙化が深刻な問題となっている。佐藤(2016)は、多忙化の本質は教師の専門家としての職域の空洞化であると指摘した。そして、それに対抗するために教師の自律性の回復と社会に開かれた公共空間としての学校の再構成が必要であると主張した。近年の日本の教育学研究は、こうした問題意識のもと、明治期以来の教師による教育研究を、専門家としての教師の成長の場としていかに発展させるかという研究課題が重視されている。 従来、教師による教育研究の歴史は「授業研究」の歴史として記述されてきた。例えば日本教育方法学会(2008)は、戦前の教師による教育研究はどのように教えるかにとどまっていたが、教育内容の編成を中核的課題とする「授業研究」が1960年代に確立され、今日に至るまでその方法が追究されてきたと記述している。しかし佐藤(1997)は、特に1960,70年代の「授業研究」は、合理的技術の適用により教師の自律性を衰退させたとともに、授業を社会的文脈から切り離したと批判した。 他方で、日本では戦前から、校内研修・サークル・実践記録などの慣行において、専門家としての教師文化が伝承されており、特に1950年代には以下の二点で注目に値する。第一に1950年代には、専門家としての教師文化の慣行として指摘されるサークルと実践記録が研究の様式として重視されていた。第二に1950年代は、「教育実践」という概念が政治性を含んだ固有の意味を有していた時代であり、教師は社会的文脈を特に重視していた。本研究はそのような1950年代における教師による教育研究を〈実践研究〉と呼称し、その意義を明らかにするために、1950年代の実践研究を推進した主要な団体の一つである「教育科学研究会」に焦点を合わせる。</p>	

- (注) ① 年月日は西暦で記入してください。
 ② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。
 ③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。
 ④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

6. 学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究開発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

本学術活動の目的は、1950年代の生活綴方を中心に据えた教師の教育研究の意義を明らかにするために、そのような教育研究を推進した主要な団体のひとつである教育科学研究会における教師の教育研究に関する主張の展開を明らかにすることであった。

本学術活動の成果は以下の2点である。第一に、1950年代半ばの教育科学研究会における「すぐれた実践を一般化する」というテーゼの意味内容が解明された。その理論的指導者である勝田は、「実践記録は教師の綴方」であると論じ、実践記録は「客観的真実」に対置される「主体的真実」を表現するものであるということを主張した。また、勝田は、教育実践の「一般化」の方法を、実践記録の記述と批評を通じて「主体的真実」を表現する「典型化」としての「一般化」と、「客観的真実」を示す「理論(化)」としての「一般化」の二つに区別していた。

第二に、1950年代後半における「すぐれた実践を一般化する」というテーゼの意味内容の展開が解明された。1950年代後半の勝田の議論においては、まず教育学の「目的」と「内容・方法」の研究が区別され、後者に属するものとして実践記録による研究が位置づけられた。さらに実践記録などによって「一般的規則」を明らかにする「典型化」は、「理論化(理論的一般化)」の前段階として位置づけられた。